

# 李商隱の政治詩

―「行次西郊作一百韻」を中心にして―

加 固 理 一 郎

## 一、序

中国古典詩には、社会的効用が常に求められていた。その状況の中で、恋愛詩という個人的、内面的な分野の作品で評価される李商隱は、特異な詩人である。ただし、李商

作状況が記される。

「行次西郊作一百韻」詩の冒頭には、次のようにその制

## 二、「行次西郊作一百韻」詩の農夫の語り

隱にも同時代の政治的事件に触発されて作られた詩歌がな

蛇年建丑月 蛇年 建丑の月

いわけではない。特に、文宗の大和九年（八三五）十一月、

我自梁還秦 我 梁より秦に還る

彼が二十四歳の時に勃発した甘露の変をめぐっては、注目

南下大散嶺 南のかた大散嶺を下り  
北済渭之浜 北のかた渭の浜を濟る

される作品がいくつか作られている。甘露の変とは、李訓、

高田長榭榭 高田 榭榭長じ  
下田長荊榛 下田 荊榛長ず

鄭注らが文宗と謀って宦官を誅殺しようとしたが、事が発

農具棄道傍 農具 道傍に棄てられ  
飢牛死空墩 飢牛 空墩に死せり

覚して、首謀者だけでなく無関係の者までが宦官によって

多数殺害されたという事件である。本稿では、まず、この

事件に関連して作られた「行次西郊作一百韻」詩の特色と、

依依過村落 依依として村落を過ぎれば  
十室無一存 十室に一の存する無し

存者皆面啼 存する者は皆面して啼き

無衣可迎賓 衣の寶を迎ふべきもの無し

始若畏人問 始め人の問ふを畏るるがごときも

及門還具陳 門に及びて還た具つたに陳ぶ

李商隱は、開成二年（八三七）十二月に、旅の途中で長安近郊の荒廢した農村を通過した。そこで一人の農夫に問

いかけた。農夫はためらっていたが、やがて口を開いた。

このような内容の記された引用部分の後に、農夫の語りが記される。そして、その語りに対する李商隱自身の感慨が述べられて結びとなる。

この農夫の語りの部分には、唐初から開元天寶を経て甘露の変に至るまでの歴史叙述が含まれている。そして、その大局的な議論によつて、この詩はすぐれた政治詩であると評価される。ただし、農夫の語りの部分に対しては、問題点も指摘される。大山岩根氏は「李商隱『行次西郊作一百韻』詩について」（『東北大学中国語学文学論集』第九号、二〇〇四）において、農夫の発言の内容に朝廷内部の政治情勢などを含むのが不自然であるとしている。そして、この農夫が李商隱自身の憤りの代弁者として機能していると思ふ見なし、それによつてこの詩の批判性は薄れ、作者自身の鬱屈した思いを書き連ねたかのような印象を与えていると

する。

農夫の語りの内容の不自然さは、すでに高橋和巳氏も感じていたと思われる。高橋氏は『李商隱』（岩波書店、一九五八）の通釈で、次に示すような操作を行う。

まず、先の引用の「及門還具陳」の直後に続く部分を引用する。

右輔田疇薄 右輔は田疇薄く

斯民嘗苦貧 斯の民 嘗て貧に苦しむ

伊昔称樂土 伊の昔 樂土と称し

所頼牧伯仁 頼る所は牧伯の仁なり

官清若氷玉 官は清きこと氷玉のごとく

吏善如六親 吏は善きこと六親のごとし

…… 況んや貞観より後

命官多儒臣 官に命ぜらるるは儒臣多し

例以賢牧伯 例として賢牧伯を以て

徴入司陶鈞 徴し入れて陶鈞を司らしむ

これを、高橋氏は次のように解釈する。

みやこ長安の右の輔翼にあたりますこの鳳翔の土地は地味が瘦せておりまして、田畑の收穫は寡く、このあたりの農民は貧しさに苦しまない時とてございませ

んでした。——と村人は語り始めた。——それでも、その昔、このあたりが楽土と呼ばれた頃もございました。それは地方の長官様が仁愛深い方であったからでございます。政治をなさる長官の方は、清廉潔白、氷の玉のようであり、役場の書記も善良で私共の親屬と同じ事でございます。……まして、太宗皇帝の御治世から以後は、一村人の語る如く、——文治政策が採用され、地方長官に任命されるもの多くは、正統的な儒教の教養を身につけた文臣であり、通例として、そのうちから、偉い地方の太守として治績いちじるしかった賢人を選抜して中央の大臣として召選されることとなった。(二五九頁)

ここでは、唐初の農村の様子が語られる。その善政が子孫へと語り継がれていたため、この農夫も知っていたということであろう。しかし、「況自貞觀後」以下は、唐王朝の地方官選任の政策であり、これは一農夫が知り得ることではない。それに対して高橋氏は、原文に対応する語のない「村人の語る如く」を補い、さらに文末の語調を変えて、作者自身の語りのように訳出するのである。

ここで問題なのは、李商隱と同時代に長安郊外に実在していた農夫が持っていたであろう知識と、作品中に登場す

る農夫の語りの内容とが乖離していることである。現代の文学批評においては、作品中の語り手が語り得る作品世界の情報の範囲は重要な着目点とされる。しかし、前近代中国の詩歌の批評においては、それを特に問題としなかった。たとえば、この詩の構成について、清の姚培謙は『李義山詩集箋注』巻一で次のように述べる。

自「及門還具陳」以下、直至「此地忌黄昏」、皆從居民口中具述開元至開成年間事、總是所以致此蕭索之由。ここでは、開元年間の玄宗の治世から開成年間の甘露の変後までが「居民」の口から語られていると見なし、そのことについて何の疑問も差し挟んではないのである。

一方、李商隱以外の詩人たちもまた、作中人物の語り得る範囲について留意していなかったと思われる。たとえば、次に引用する杜甫の「兵車行」(『杜詩詳注』巻二)にも、一人の出征兵士の言葉ととれる部分に、その人物が知り得る範囲を逸脱した内容が含まれている。

……

道旁過者問行人	道旁の過ぐる者	行人に問へば
行人但云点行頻	行人 但云ふ	点行頻りなりと
或從十五北防河	或いは十五より北のかた河を防ぎ	
便至四十西當田	便ち四十に至りて西のかた田を當	

む

去時里正与裏頭 去く時 里正 与に頭を裏み  
帰来頭白還成辺 歸り来たれば頭白くして還た辺を

成る

辺庭流血成海水 辺庭の流血 海水を成すも

武皇開辺意未已 武皇 辺を開き 意 未だ已まず

君不聞漢家山東二百州 君聞かずや 漢家山東の二

百州

千村万落生荊杞 千村万落 荊杞を生ずるを

縱有健婦把鋤犁 縱ひ 健婦の鋤犁を把る有るも

禾生隴畝無東西 禾は隴畝に生じて東西無し

……

ここでは、十五歳で徴兵され、初老に至つてまた辺地へ  
驅り出される状況や、男手の失われた村での農作業の苦勞  
などを、出征兵士が語っている。これらは、兵士の言葉と  
して自然な内容である。しかし、その語りの中には、「武  
皇開辺意未已」つまり辺境での軍事行動の継続が玄宗の意  
志によつており、その戦争によつて、「漢家山東二百州」  
つまり唐王朝の領土が広く荒廢していることが含まれる。  
これらは、王朝の権力機構に参与し、その権力の基盤とな  
る生産力の向上にも策を講じなければならぬ士大夫の視

点による言葉である。すなわち、ここでは、一兵士の発話  
の中に杜甫自身の知見を含ませている。「行次西郊作一百  
韻」詩における作中人物の語りの様態も、これと同質であ  
り、中国古典詩の基準からすれば、ことさらに欠点とすべ  
きではないのである。

ただし、前近代の批評でも、「行次西郊作一百韻」詩の  
農夫の語りの内容について、別の観点から疑問を呈するも  
のがある。次に胡震亨『唐音統籤』巻五百六十三、戊籤二  
の評語を示す。

天宝事何可復道、未及開成事、是近事、乃生色耳。

この指摘にあるように、確かに、農夫の語りの末尾部分  
である開成年間の甘露の変直後とそれから三年後の農村の  
状況の描写が、この詩の中で最も精彩を放っている。次に  
これを引用する。

鳳翔三百里 鳳翔三百里

兵馬如黃巾 兵馬 黃巾のごとし

夜半軍牒來 夜半に軍牒来たりて

屯兵万五千 兵の万五千を屯す

郷里駭供億 郷里は供億に駭き

老少相扳牽 老少 相扳牽す

兒孫生未孩 兒孫 生まれて未だ孩ならざるに

棄之無慘顔

之を棄てて慘顔無し

不復議所適

復た適く所を議せず

但欲死山間

但山間に死せんと欲す

爾来又三歳

爾来 又三歳

甘沢不及春

甘沢 春に及ばず

盜賊亭午起

盜賊 亭午に起る

問誰多窮民

誰かと問へば 窮民多し

節使殺亭吏

節使 亭吏を殺すは

捕之恐無因

之を捕らふるに因無きを恐るればなり

咫尺不相見

咫尺相見えす

早久多黃塵

早久しくして黃塵多し

官健腰佩弓

官健は腰に弓を佩し

自言為官巡

自ら言ふ 官の為に巡ると

常恐值荒迴

常に恐る 荒迴に値らば

此輩還射人

此の輩 還つて人を射るを

媿客問本末

媿づ 客の本末を問ふを

願客無因循

願はくは客よ 因循する無かれ

郿塢抵陳倉

郿塢より陳倉に抵る

此地忌黃昏

此地 黃昏を忌む

この部分については、また姜炳璋が『選玉溪生詩補說』

(郝世峰輯、南開大学出版社、一九八五)で次のように述

べている。

五段、甘露之變、……郿坊節度使肅弘、涇源節度使王茂元皆勦兵近郊、以備非常、而云「兵馬如黃巾」、又云「但求死山間」、則想其所過騷擾、饋食民間、而棄子貼婦、苦不勝言矣。此可以補史氏之闕。義山臨文不諱、其直道非後人所能及也。六段「捕之恐無因」、又云「此輩還射人」、想見將吏邀功、妄殺無辜、以供獻級、無事為兵、有變即為賊、此又足以補正史之未備也。

先の引用のうち、「爾来又三歳」から後が、今回の旅の時点での出来事である。そして、その前の部分も、やはり作者自身の見聞に依拠していると考えられる。すなわち、張采田『玉溪生年譜會箋』によれば、甘露の變の勃発時に李商隱は鄭州にいたものの、この時期には進士受験のため鄭州と長安を頻繁に行き来していた。その途上で、事変直後の長安郊外の様子を目撃したはずである。そのため、この部分の描写は直接的に読者の心情に訴える生々しさを帯びている。特に、「兇孫生末孩、棄之無慘顔。不復議所適、但欲死山間。」は、生命に対する執着心さえも失った人間性喪失の極みを描いて、陰慘である。そしてさらに、ここには公式の記録には残されない官軍の犯罪的行為を暴く内

容をも含んでいる。それを、姜炳璋は正史を補う詩史としての価値と見なすのである。

しかし、唐初から天宝年間を経て今に至るまでの歴史的記述が長々と続いた後に、この部分が置かれているため、その存在感が弱められている。それを胡震亨は指摘したのである。その指摘に対しては、張采田が『李義山詩辨正』で次のように反駁する。

此詩專慨牧伯非人、述天宝事所以追原禍始也。与鋪叙乱離者有別、胡說非也。

ここでは、地方官の非道の根源にまで論及するため、天宝の事を述べたとしている。この詩の構成意図は、張采田の指摘の通りであろう。すなわち、李商隱は、この詩を作る際に、大局的な政治論の展開を最も重視し、農民の困窮の記録には主眼を置いていなかったのである。

これは、先に示した杜甫の「兵車行」と比べても明らかである。「兵車行」では、兵士の語りは個人的な境遇から始まっている。そして、この兵士の置かれている状況が同時代に普遍的であるのを示すため、兵士個人には認識し難い国家全体の状況に言及する。つまり、杜甫自身の視点による語りは、兵士本人の体験による語りの補助となっているのである。それに対して「行次西郊作一百韻」詩では、

農夫の語りは唐初の善政からはじまっており、本人の体験についてはその末尾に記される。この構成から見て、極論すれば、李商隱が見聞した農民の過酷な状況は、自己の政治論を組み立てるための材料の一つでしかなかったとも言える。

### 三、弘農尉辭職と「行次西郊作一百韻」詩との関連性

李商隱は開成四年（八三九）、二十八歳の時、虢州弘農県の県尉となったが、「活獄」つまり罪人の再審をめぐって陝虢觀察使孫簡と対立し、職を辞する。この行動は、「行次西郊作一百韻」詩と関連付けられることが多い。すなわち、この詩の中の、官軍の徵発によって困窮した農民が盗賊となっている、という言説と結び付け、李商隱は農民に同情して孫簡と対立した、と理解されるのである。次に、この出来事について語った李商隱の詩文を取り上げ、それらと「行次西郊作一百韻」詩の内容との関連性について論じる。

李商隱が農民の状況を理解していたのは確かであり、それに対する同情心がまったくなかったとは言いが切れない。しかし、この事件をめぐって作られた李商隱の詩文には、農民への同情心は示されていないのである。まず、この辞

職の時に虢州刺史に献じた「任弘農尉献州刺史乞仮帰京（弘農尉に任せらるるも、州刺史に献じて仮を乞ひて京に歸る）」詩を次に引用する。

黄昏封印点刑徒 黄昏に封印して刑徒を点じ

愧負荆山入座隅 愧ちて荆山に負き座隅に入る

却羨下和双別足 却つて羨む 下和双つながら足を

別られ

一生無復没階趨 一生 復た階を没くして趨るなき

を

この詩の第一句の「刑徒」の中には、無辜の農民が含まれているのかも知れない。そして、第三句に見える下和の故事は、正しい意見が権力者に容れられず、かえつて罪を得たことを示す。これが活獄のことを示唆している。しかし、ここではそれに対する義憤といった心情は示されていない。むしろ、内向的な自己憐憫が吐露されるのである。すなわち、下和は足を切られて慌ただしい宮仕えができなくなったが、それすら意に沿わない仕事をしなければならぬ自分の境遇よりはましだとするのである。

この事件についてさらに詳しく語られるのは、「与陶進士書」（劉学鑑・余恕誠『李商隱文編年校注』へ中華書局、

二〇〇二頁）第一冊、四三三頁）である。李商隱はいったん

弘農尉を辞職したが、新たに着任した陝虢觀察使姚合の説得によつて復職した。その後、陶進士なる人物が李商隱に文章指導を願ひ出て、それに対する返事がこの文章である。その冒頭近くには、次のように自らの信念について記される。

始僕小時、得劉氏六説讀之。嘗得其語曰、是非繫於褒貶、不繫於賞罰、礼樂繫於有道、不繫於有司。密記之。

（始め僕小き時、劉氏の『六説』を得て之を讀む。嘗て其の語の、「是非は褒貶に繫り、賞罰に繫らず、礼

樂は有道に繫り、有司に繫らず」と曰ふを得、密かに之を記す。）

ここでは、まず劉迅『六説』の語によつて、儒教の徳治主義の理念を示す。物事の是非は、法に基づく賞罰によつて規定されるのではなく、また、人間の行動規範である礼樂は、官吏がその運用に関わるのではない。それらは、道徳を備えた人物が規定し運用するのである。李商隱はこのような信念をもつて世に出ようとした。しかし、進士および吏部試の受験においては、この信念を揺がす出来事が連続して起こる。それらについて述べた後、弘農尉の辞職について次のように記す。

尋復啓与曹主、求尉於虢。……始至官、以活獄不合人

意、輒退去。将遂脱衣置笏、永夷農牧。会今太守憐之、催去復任。逕使不為升斗汲汲、疲瘁低儼耳。然至於文字章句、怙息不敢驚張。嘗自呪願得時人曰、此物不識字、此物不知書。

(尋いで復た曹主に啓与し、尉を號に求む。…：始めて官に至り、活獄の人の意に合はざるを以て、輒ち退去す。将に遂に衣を脱ぎ笏を置き、永く農牧に夷しくせんとす。会今の太守之を憐れみ、復任を催去す。逕ちに升斗の為に汲汲として、疲瘁低儼せざらしむるのみ。然るに文字章句に至りては、怙息して敢て驚張せず。嘗て自ら時人の「此の物字を識らず、此の物書を識らず」と曰ふを得たるを呪願す。)

ここに語られているのは、文章には穩便なことしか書かず、文字や書物についての知識の豊富さを人に覺られないように願っている、という知識人としての自己の否定なのである。

「写陶進士書」のこの部分以前にも、自己の文章と知識を否定する言葉が繰り返して見えている。まず、都に上つて有力者に対する行巻をおこなったが、その扱いがいい加減であったために、占いの文や人に頼まれた文書以外には作文をしなくなつた、と語る。そして、令狐綯の推薦によつ

て進士に及第した時には、すでに著述に心配りを怠るような状態になつていたとする。さらにその後、幅広い知識を問われる博学宏辞の試験を受験し、不合格になつた後の思ひは、次のように語られる。

設他日或朝廷或持權衡大臣宰相、問一事、詰一物、小若毛甲、而時脱有尽不能知者、則号博学宏辞者、当其罪矣。私自恐懼、憂若囚械。後幸有中書長者曰、此人不堪、抹去之。乃大快樂、曰、此後不能知東西左右、亦不畏矣。

(設し他日或いは朝廷或いは權衡を持せる大臣宰相、一事を問ひ、一物を詰め、小さきこと毛甲の若きも、時に脱し尽く知る能はざる者あれば、則ち博学宏辞と号する者、其れ罪に當る。私かに自ら恐懼し、憂ひて囚械せらるるが若し。後幸ひに中書の長者有りて曰く、「此の人堪へず、之を抹去せん」と。乃ち大いに快樂し、曰く、「此の後東西左右を知る能はざるとも、亦畏れず」と。)

これは、逆説的な口調で憤りを表しているのが印象的である。ただし、官吏登用試験の場での挫折を自己の文章と知識の否定と捉えることに、不自然さはない。しかし、弘農尉の辞職についても、それらと共通した感慨を述べてい

るのは、かなり奇異に思われる。すなわち、これも文章に拠つて立つ知識人としての自己が否定された出来事であり、試験の落第と同じ意味を持っている、と捉えられているのである。

つまり、「与陶進士書」で「是非繫於褒貶、不繫於賞罰、礼樂繫於有道、不繫於有司」と述べるように、彼には、法の上位にある道徳によつて是非の判断を下すことが許される知識人としての自負があつた。しかし、県尉の職務を行うに当たつては、法に束縛される官吏としての振る舞いを求められる。そのことが、活獄をめぐる上司との対立によつて表面化したのであつた。それによつて、知識人としての自負心が傷つけられたことは、農民の苦境を救えなかつたことよりも、李商隠にとつては重大だつたのである。

これは、「行次西郊作一百韻」詩を制作した精神のあり方と表裏一体であると言える。すなわち、自ら目撃した農民の惨状を含めて一篇の詩を構成するに当たつても、その状況の効果的な伝達を最優先はしない。むしろ、唐王朝の歴史に関する自らの知識を開陳し、それに基づいた政治論の展開を重視する。そして、その議論の中に、農民の状況の描写を埋没させてしまうのである。

#### 四、李商隠の求めた政治参加の様態

農民の立場に同調できない李商隠は、また、実際の田園生活にも安逸を得られなかつた。彼は、会昌二年（八四二）、三十一歳の時に母が没したため、官を離れて喪に服す。その服喪中には、強烈な上昇志向と、それが満たされない焦燥感を込めた詩とともに、閑居を楽しもうとする内容の詩も作っている。その後者の詩の一つである「四年冬、以退居蒲之永樂、渴然有農夫望歲之志、遂作憶雪又作殘雪詩各一百言、以寄情於遊旧（四年冬、蒲の永樂に退居するを以て、渴然として農夫望歳の志有り、遂に『憶雪』を作り又『殘雪』詩を作る、各一百言、以て情を遊旧に寄す）」と題された二首のうち、「憶雪」詩の後半部を引用する。

庭樹思瓊蕊	庭樹	瓊蕊を思ひ
粧樓認粉綿	粧樓	粉綿を認む
瑞邀盈尺日	瑞は盈尺の日に邀へ	
豐待兩歧年	豐は兩歧の年に待つ	
預約延枚酒	預約す	枚を延く酒を
虛乘訪戴船	虚しく乗る	戴を訪ふ船に
映書孤志業	書を映しては志業に孤き	
披覽阻神仙	覽を披りては神仙を阻む	

幾向霜堦歩 幾たびか向かふ 霜堦の歩

頻將月幌褰 頻りに將もちふ 月幌の褰

玉京応已足 玉京 応に已に足るべし

白屋但顯然 白屋 但顯然たり

この詩は、題にある通り、蒲州永樂県にて閑居している時、農夫のように豊年を願う気持ちが起こって作った詩である。その中には、確かに「瑞邀盈尺日、豊待兩歧年」のように詩題に示された心情に合った句もある。しかし、その結びでは、身は田園にあつても心は都の雪景色を思っている様子を表している。農民のような心持ちで詠んだとする詩ですら、このような感慨で結ばれるほど、朝政参加の意欲は強かつたのである。

しかし、李商隱の上昇志向は、現実性を伴っていない。弘農県は、洛陽と長安の中間の緊県であり、そのような重要な県の尉は、高位に登るための端緒となる官職であつた。しかし、彼はそれを簡単に投げ出す。そして節度使などの幕府の文書係のような不安定な職を転々とするのである。李商隱は、結局どのような政治参加を求めていたのか。それについて、やはり甘露の変をめぐる政治詩によって考えてみたい。

「行次西郊作一百韻」詩とならんで、甘露の変に関する

李商隱詩に、「有感二首」「重有感」がある。その他、甘露の変に関して、文宗、張祐、白居易、賈島、杜牧が詩歌を作っている。詹滿江氏は、まず李商隱以外の詩歌について検討し、それらが各作者の置かれた立場や心境に即した内容を持つて示す。そして、それらすべてが宦官について触れるのは避けているのに対して、李商隱だけは宦官を筆誅していることを明らかにする。このように、李商隱の詩が、他に類例を見ない独自の政治詩となつた理由の一つとして、宦官に抵抗する令狐楚の姿勢に動かされたことを挙げる。左僕射であつた令狐楚は、事變の直後に文宗皇帝に召され、事態の收拾に当たつた。そして、文宗はそのまま令狐楚を宰相に任命しようとした。しかし、楚の反抗的な態度を良く思わない宦官の反発によって、それは果たされなかつたのである。

詹氏の論から一歩進めて、李商隱は「有感」などの詩を作る時、上記の詩人たちのように作者自身の立場によっているのではなく、令狐楚の立場によつて発言していたと考へたい。たとえば、「重有感」詩の結びには、次の句が見られる。

昏号夜哭兼幽蹟

昏号夜哭 幽蹟を兼ね

早晚星関雪涕収

早晚 星関 涕を雪ぎて収めん

これについて、高步瀛は、「此以『星闕』借喻天子禁兵所在、『雲涕収』謂取中官禁兵歸之天子也。」（『唐宋詩拳要』卷五）と解釈する。宦官が掌握する禁軍の指揮権を皇帝のもとに取り戻すとは、一介の布衣である李商隱にははじめから成し得ることではない。しかし、令狐楚が宰相に任ぜられたとすれば、宦官の勢力を弱め皇帝の権力を安定させるために必ず成すべきことである。すなわち、「有感」などの詩は、皇帝の側近にあつて、宦官とも対峙しなければならぬ高級官僚の立場で作られた詩と見ることができるのである。

高級官僚の立場にあれば、「与陶進士書」に述べられるように、法の上位にある道徳による判断を下すのも可能になる。しかし、李商隱は、現実的な努力と忍耐によつてその立場を得ようとはしなかつた。彼は、そのような立場による言説をなすことだけを追求していたのである。先に引用した姜炳璋『選玉溪生詩補説』に「義山臨文不諱、其直道非後人所能及也。」とあるように、李商隱の詩歌に表れた政治的言説は、保身を顧みないかのような峻厳さを含んでいるとされる。甘露の変の際に作られた詩歌にも、これは当てはまる。それは、自分個人の現実の立場によるのではなく、国家に対する強い権限と責任を有する立場を仮構

し、その位置によつて言説をなしているためと考えられる。「有感」詩などについては、令狐楚からの伝聞で作られた可能性があるため、そのような視座によつて作られたとも考えられる。しかし、「行次西郊作一百韻」詩は、それらの詩歌とは異なり、自らの見聞による作品である。それにもかかわらず、そこでは、観察者としての自己の視点に即した記述の部分を、より高い位置から俯瞰的に記述された歴史論と政策論に埋没させている。このことから、政治詩における高位の視座の設定が、彼の志向によるものであることがわかるのである。

これは、駢文作家としての李商隱の態度にも反映されている。彼の駢文は代作文書を主としており、それらは官界の地位がより高い依頼者の視座によつて作られるものである。そして、彼は代作文書であつても、できる限り自己の政治的見解を含ませようとしていた。<sup>(18)</sup>甘露の変の後、彼が同時代の出来事を対象とした政治詩を作ることは、次第に少なくなつてゆく。これは、駢文による政治的言説の表出のほうで、彼自身の志向により近かつたからであろう。

#### 注

(1) 李商隱の伝記に関しては、張采田『玉溪生年譜会箋』に

従う。

- (2) 甘露の変については、『資治通鑑』巻二百四十五、唐紀六十一、文宗大和九年十一月に詳細な記事がある。この事件と李商隱の詩歌との関わりについての研究では、詹滿江『李商隱研究』（汲古書院、二〇〇五）第二部李商隱の隱喩と諷刺、第一章甘露の変と李商隱（初出『日本中国学会報』第三十七集（一九八五）「甘露の変と詩人たち—李商隱を中心として—」）がある。
- (3) 李商隱の詩歌の底本は、劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解（増訂重印本）』（中華書局、二〇〇四）とする。この詩は第一冊二五三頁にある。
- (4) 全詩綱拳目張、縦横交織、反映了唐王朝兩百多年的政治歴史和它在由盛而乱而衰的過程中出現的各種矛盾和不可避免地走向衰亡的歴史趨勢。其視野之広闊、内容之豊富、格局之宏大、政治色彩之濃厚、都超過了杜甫的「自京赴奉先詠懷五百字」与「北征」、是名副其實的一代史詩。
- 劉学鍇『李商隱伝論』（安徽大学出版社、二〇〇二）下編第五章、李商隱的政治詩、五八九頁
- (5) 『兵車行』がこのような内容であるため、現代日本の注釈書では、どこまでを兵士の言葉として訳出するか、様々な説がとられている。それらは、松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、一九八七）の「兵車行」の項（執筆、宇野直人）に整理されている。
- (6) 我們記得、商隱在「行次西郊作一百韻」中曾提到過、「盜賊亭午起、問誰多窮民。節使殺亭吏、捕之恐無囚」的情况。看来、他对于「盜賊」与「窮民」的關係早有了解。有些被官府認識是「盜賊」的、在他看来不過是被生活逼得走投無路的窮民。他对他們是同情的。
- 董乃斌『李商隱伝』（陝西人民出版社、一九八五）中卷第十二章、從校書郎到弘農尉、一一九頁
- (7) 底本第一冊三七四頁
- (8) 楚人和氏、得玉璞楚山中、奉而獻之厲王。厲王使玉人相之。玉人曰、石也。王以和為誑、而刖其左足。……和曰、吾非悲別也。悲夫宝玉而題之以石、貞士而名之以誑。此吾所以悲也。王乃使玉人理其璞、而得宝焉。
- 『韓非子』和氏第十三
- (9) 劉迅は、劉知幾の子。『旧唐書』巻二百二、列伝第五十二に「迅、右補闕、撰六説五卷。」とあり、『新唐書』巻一百三十二、列伝第五十七に、「迅、統詩、書、春秋、礼、樂五説。」とある。ただし、『六説』の書は伝わっていない。
- (10) 出其書（李商隱が行巻を行ったことを指す）、乃復有置之而不暇読者、又有黙而視之、不暇朗読者。……故自大和七年後、雖尚心筆、除吉凶書、及人憑倩作牋啓銘表之外、不復作文。
- (11) 既得引試、会故人夏口（高鍇）主舉人、時素重令狐賢明、一日見之於朝、揖曰、八郎之交誰最善。綯直進曰、李商隱者、三道而道、亦不為薦託之辭、故夏口与及第。然此時実於文章解退、不復細意經營述作。

(12) この時期の李商隱の心情については、上田武「李商隱と陶淵明」(『都留文科大学研究紀要』第三十二集、一九九〇)に詳しい。

(13) 底本第二冊五二二頁

(14) 礪波護「唐代の県尉」(『史林』五七巻五号、一九七四) および荒井健『シャルパンティエの夢』(朋友書店、二〇〇三)に詳しい。

(15) 甘露の変をめぐる詩人たちの反応は、それぞれの立場や心境のちがいによって、詩作の上に興味深い相異となつて表れている。白居易の傍觀者のな反応も、杜牧の友人への同情から發する李訓・鄭注に対する非難も、それぞれに詩人の立場や心境を考えると、頷けるのである。ことに事件の性格上、宦官について触れることは最も避けなければならない。……令狐楚の言動は、宦官に対する精一杯の抵抗であつたにちがいない。そして、李商隱の宦官を筆誅した詩は、彼の庇護者であつた令狐楚の宦官に対する抵抗と呼応している。令狐楚の姿勢に動かされたからこそ、李商隱は他の詩人たちが触れようとしない宦官について、敢えて詩に詠じたのだと思う。李商隱のように、まだ身は布衣であつて、事件に近かつた令狐楚と心中通じ合つていた詩人が、最も事件の核心に迫る詩を作り得たのである。

詹滿江『李商隱研究』第二部李商隱の隱喻と諷刺 第一章 甘露の変と李商隱 一三三〜一六頁

(16) 十一月……癸亥(二十二日)……上(文宗)御紫宸殿、

問「宰相何為不來。」仇士良(宦官の首魁)曰「王涯等謀反繫獄。」因以涯手狀呈上、召左僕射令狐楚、右僕射鄭覃等升殿示之。上悲憤不自勝、謂楚等曰「是涯手書乎。」对曰「是也。」誠如此、罪不容誅。」因命楚、覃留宿中書、參決機務。使楚草制宣告中外。楚叙王涯、賈餗反事浮汎、仇士良等不悅、由是不得為相。

『資治通鑑』卷三百四十五、唐紀六十一、文宗大和九年

(17) 底本第一冊一三八頁  
(18) 拙稿「李商隱の代作の態度について」『大尉衛公会昌一品集序』を中心にして(『中國文化』一九九四)を参照のこと。

(横浜市立大学)